

## 陰の美と神保町の古書店

敷地は東京神田神保町。本の街の古書店は皆陳列する本が日焼けしないように北側を向いている。本来負の要素である影に価値を持つ神保町の古書店に美の要素を付加することで、陰翳からみる日本らしい建築空間をもつ古書店を考える。

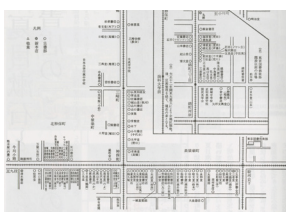
東京神田神保町では陰には価値がある。本が日  
焼けしないように古書店は皆北側を向き、陰の中  
で店を開いている。ここでは日の当たらない場所が  
使い道があるのだ。この神保町の古書店と影の関  
係を利用し、神保町の都市（陰）の中に古書店（影）  
をつくり、「日本の影の文化」を継承する「古書店  
を計画する。



神保町に古書店が誕生し、大火や震災、戦災を経て街の復旧の柱となった古書店は、本が日焼けしないよう北側を向き、街を形作っていった

大正2年(1913年)2月20日、大正の神保町大火が発生する。神保町は明から相次いだ火事には災難をわけていたが、それを大きく超える規模の大火だった。しかし、その後の書店街の復旧は早く、町の再建を奨励し繁栄の中心地は再び神保町から、現在の東の神保町一丁目に移転・集中することとなる。下図は当時の古書店の分布図である。

大正 2 年（1913 年）2 月 20 日、大正の神田大火が発生する。神保町は明治から相次いで火事に見舞われていたが、それらを大きく超える規模の大火だった。しかし、その後の書店街の復興は早く、街の再建を契機に繁栄の中心地は南神保町から、現在の東の神保町一丁目に移転・集中することとなる。下図は当時の古書店の分布図である。



昭和の翌年からは東京の町は空襲に見舞われ、その被害は神保町にも広がっていったが、「本」という文化財のある町という理由で一部、空襲を免れたという伝説もある。上図は過去の資料をもとにして、戦後の昭和22年（1947年）の町をほぼ再現した「神保町現況図（交通マップ）」である。

神保町南側に現在の靖国通りを挟んで北側は空襲などによる壊滅的被害が顕著に表れているが、靖国通り南側の古書店の集中していた中區本町はほとんど被害を受けていないことがわかる。町は壊滅状態には至らず今日までの態様を保つことができた。

開戦の翌年から東京の空は闇に見舞われ、その被害は神保町にも広がっていったが、「本」という文化財がある町」という理由で一部、空襲を免れたという伝もある。上図は過去の資料をもとにして、戦後の昭和22年（1947年）の町並みを再現した「神保町戦災復興マップ」である。



神保町周辺に、東京大学や専修大学などの教育施設が立ち並びはじめた明治10年代。書店が圏出し始めることになる。

当時は、古書店と新刊書店がはっきり区別されていた。当初は、三省堂書や富山房でも古本を取り扱っていた。



神保町周辺に、東京大学や専修大学などの教育施設が立ち並びはじめた明治10年代、書店が誕生し始めることになる。

当時は、古書店と新刊書店がはっきり区別されておらず、当初は三省堂書や富山房でも古本を取り扱っていた。



大正時代に発生した神田大火や関東大震災からの復興によって、神保町の古き街の町並みは形づくられていった。

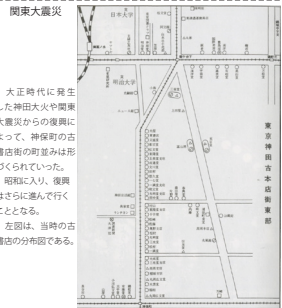
昭和に入り、復興とともにどんどん行くこととなる。

左図は、当時の古地図の分相図である。

大正時代に発生した神田大火や関東大震災からの復興によって、神保町の古書店街の町並みが形づくられていた。

昭和に入り、復興はささらに進んで行くこととなる。

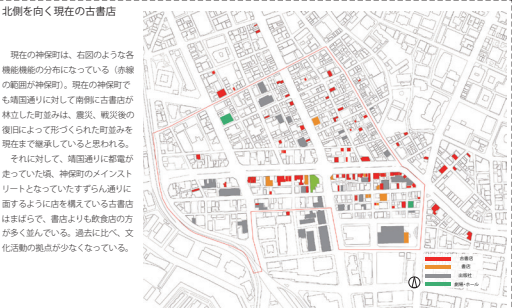
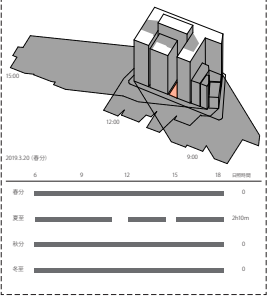
左図は、当時の古書店の分布図である。



現在の神保町は、右図のような各種機能の分布になっている（赤線の範囲が神保町）。現在の神保町でも、城端通りに対して南側にも書店が林立した町並みは、戦前、戦後の復興によって形づくられた町並みを現在まで継承していると思われる。

それに対して、城端通りに電車が走っていた頃、神保町のメインストリートとなっていたすすきん通りに面するようには店を構えている書店はほとんど、書店よりも飲食店の方が多く並んでいる。過去と比べ、文化活動の拠点が少なくなっている。

現在の神保町は、右図のような各種機能の分布になっている（赤線は商業地と神保町）。現在の分布では、地面透視に対して商業・古書店が林立し、町並みは、震災・戦後の復興によって形成された町並みを現在まで継承していると思われる。それに対して、地面透視に電気が走っていた頃、神保町のメインストリートとなっていたすすきよ通りに沿うように店舗を構える古書店は、それに対して、震災よりも命の危険が少なく見えている。過去に比べ、文芸活動の拠り所がなくなっている。

[illegible]

神田神保町三丁目の靖国通り沿いにある敷地面積約 60 m<sup>2</sup>の敷地である。靖国通りに面した北側以外の3 面はビルに囲まれていた。

周囲のオフィスビルの高さも、30m 以上で目当たりの悪い地域になっている。そのため、夏以外は直射日光がほぼ入らず、夏の暑気についても数時間ずつビルの間から日が入るほどである。





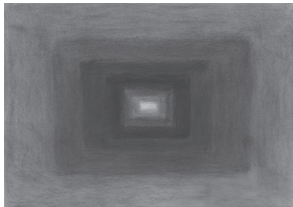


# 陰の中に光を差し込むヴォイド

## 日本 座敷

### 鋭い光

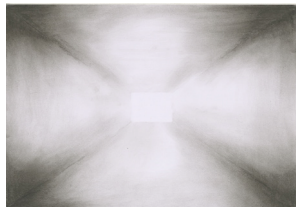
太陽の光線の入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり、縁側を附けたりして—直射光を遮る。  
そして、屋内へは、庭からの反射が障子を通してはの明るく忍び込むようにする。  
われわれの座敷の美の要素は、この間際の鋭い光線に他ならない。



## 日本 座敷

### 光を届けるヴォイド

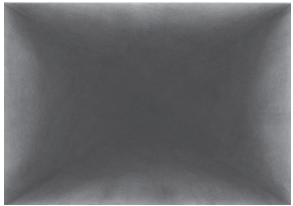
空間の中央にある地上階から屋上まで伸びるヴォイドは光が届かない地上階へ間接光を届け、地上階の床面にあった光は十字グリッドの構造体の隙間から光が外に溢れ、周囲に柔らかな光を広げる。



## 広間

### 灯に照らされた間

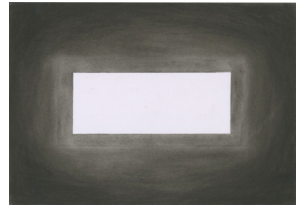
中居が、大きな立派の前に暖炉を囲んで居たが、昔二畳ばかりの明るい世界を照らしている。その立派の境方には、天井から落ちるような、高い、濃い、唯一と色の闇が垂れていて、壁に行き当たったようにはね返されているのであった。



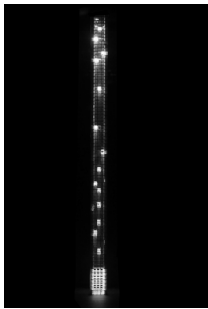
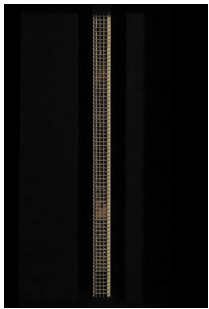
## 広間

### 闇を照らす間接光

光ダクトの中に入り込んだ光は、本棚につけられた障子や建具を介して柔らかな光を光ダクトを囲む空間に入れる。それは、真っ暗な闇の中に鋭い光がじわりと広がり、空間を照らしながらも、驚もあるような光と闇の調和した空間をつくりだす。



## ヴォイドから差し込む光



空間の中心には大きな光ダクトが地上階から最上階まで通っている。そして、そのヴォイドを本棚が囲んでいる。

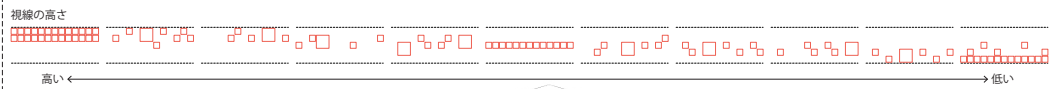
ここで挙げた金網、砂壁、漆の素材を利用して、空間に入る光の強さを調節し、空間に変化をつける。

## ヴォイド内部

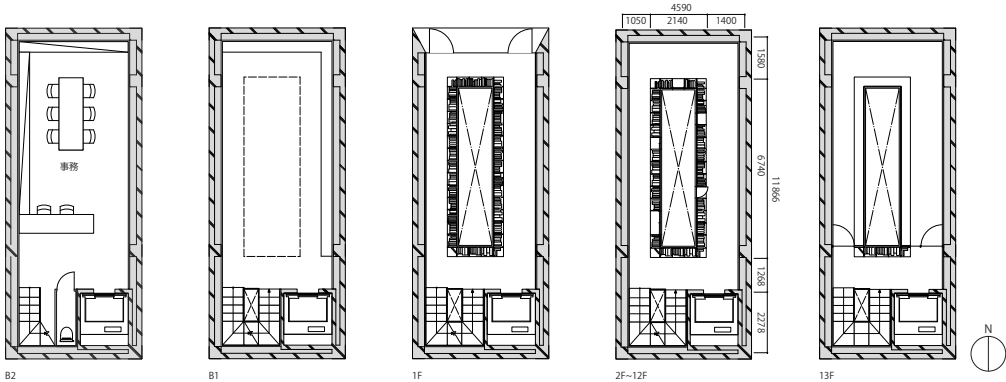


ヴォイド内部は建築空間の中で最も明るい部分となる。ヴォイド自体は本棚に囲まれ、その内側に光ダクトの機能が設置される。ヴォイドは地下1階で切れており、入った光は地下一階の床面に落ちるようになっている。

## 開口の高さ→縁側から一番奥の部屋までの視線の変化



## 平面計画 S=1:300



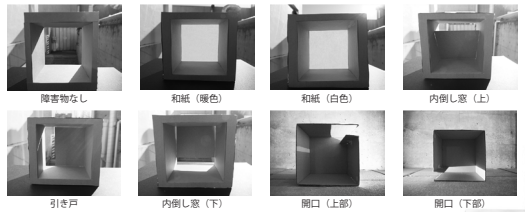
## 光ダクト

訪れた人の滞在する空間を壁と本棚で囲むことで闇の空間をつくり、中央に光ダクトを配置した、光と闇の空間が反転した関係をつくる。本棚の中に紛れた開口から闇の空間に向かって差し込む光によって、闇の空間を柔らかく照らし、光と闇の調和した陰影の伝統美を再現した空間を創出する。

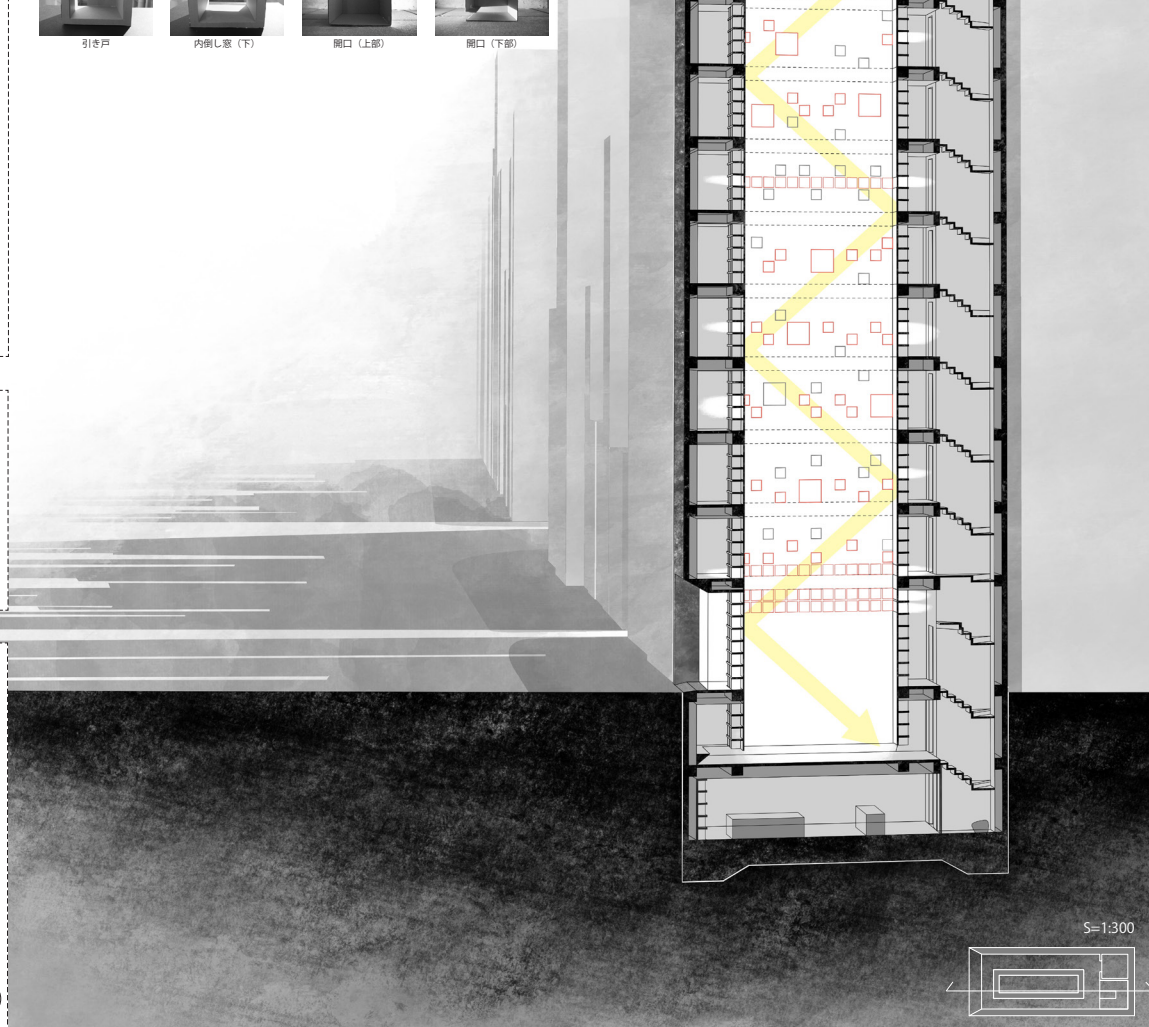
## 光取りとなる開口

赤い開口 → 扉に光が差し込む開口 グレーの開口 → 開閉可能な開口

訪れた人は開閉可能な建具を操作し、自分が本を探しやすい、ゆっくりと本を読める明るさ暗さに調整することができる。



障害物なし 和紙（暖色） 和紙（白色） 内側し窓（上） 引き戸 内側し窓（下） 開口（上部） 開口（下部）



S=1:300



